

易遊船

易遊

特44

十七

789

東 京 圖 書 館

二  
八  
冊

五  
號

四  
八  
架

函

音  
樂  
類

和  
書  
門

多岐



乃者乃九州薩平國  
乃乃乃乃乃乃乃乃

者乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃

ていつのちのちの田といふやうなる  
毎年も遊船とかがうの田つ  
のきとちのちのちのちのちのちのち  
日暮夜の出新館の中あり  
より出は来ぬといふやうなる  
此の田方といふは名も夜と中一  
あ

あき人の心なれはうまうまなるか  
うせうせなる者となんかゆるなるか  
夜と夜中。田つれきと夜と  
せうせうやとなんかゆるなるか  
中へた遊射の事ありては  
射とらぬのみふは今うまうま

のそを<sup>男</sup>ハハと反らけむは  
片<sup>ノ</sup>々<sup>ツ</sup>と<sup>イ</sup>く<sup>ヲ</sup>キ<sup>レ</sup>ル<sup>ト</sup>  
よ<sup>ク</sup>た<sup>マ</sup>へ<sup>レ</sup>ら<sup>ル</sup>レ<sup>ト</sup>  
片<sup>ノ</sup>々<sup>ツ</sup>と<sup>イ</sup>く<sup>ヲ</sup>キ<sup>レ</sup>ル<sup>ト</sup>  
お<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>  
お<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>  
お<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>  
お<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>

お<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>  
お<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>  
お<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>  
お<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>  
お<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>  
お<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>  
お<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>  
お<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>

かきよきまのこゝろにまはるる  
たに射りて情なき若しと  
あれ<sup>男</sup>河と名を射り情なき若  
と預けりていふ命なきと  
しむるまのこゝろにまはるる  
かきよきまのこゝろにまはるる

かきよきまのこゝろにまはるる  
たに射りて情なき若しと  
あれ<sup>男</sup>河と名を射り情なき若  
と預けりていふ命なきと  
しむるまのこゝろにまはるる  
かきよきまのこゝろにまはるる  
かきよきまのこゝろにまはるる  
かきよきまのこゝろにまはるる

Handwritten text in a cursive script, consisting of approximately 10 lines of text. The script is dense and characteristic of early modern Japanese calligraphy.

Handwritten text in a cursive script, consisting of approximately 10 lines of text. This section is separated from the one above by a vertical line. The script is dense and characteristic of early modern Japanese calligraphy.

Handwritten characters in the left margin, likely a page number or a reference mark.

Handwritten characters in the left margin, likely a page number or a reference mark.

花のさかすかす <sup>男</sup> 花のさかすかす  
花のさかすかす 花のさかすかす  
花のさかすかす 花のさかすかす  
花のさかすかす 花のさかすかす  
花のさかすかす 花のさかすかす  
花のさかすかす 花のさかすかす  
花のさかすかす 花のさかすかす  
花のさかすかす 花のさかすかす  
花のさかすかす 花のさかすかす  
花のさかすかす 花のさかすかす

花のさかすかす 花のさかすかす  
花のさかすかす 花のさかすかす  
花のさかすかす 花のさかすかす  
花のさかすかす 花のさかすかす  
花のさかすかす 花のさかすかす  
花のさかすかす 花のさかすかす  
花のさかすかす 花のさかすかす  
花のさかすかす 花のさかすかす  
花のさかすかす 花のさかすかす  
花のさかすかす 花のさかすかす  
花のさかすかす 花のさかすかす

とね戸とちや子女ありては

けりて解もらふは

置おく海らりては

是の九列日くしりて

かへりては

あふり。十ヶ年おわりては

あふり。自行らりては

あふり。眉をさしき。唯今う奉

あふり。下りては

あふり。なむらりては

あふり。あふりては

あふり。あふりては

あふり

あふり



方<sup>早</sup>々いそいそとあつた。

けさの朝はあつた。

あつた。

あつた。

あつた。

あつた。

七

あつた。

あつた。

あつた。

あつた。

あつた。

あつた。

七

七



その終乃ば下を繰りてをまき  
↑  
しつゝもどしてをなす其の  
あつたをかく後へ  
みあつたをきり集報りある  
しつゝもどしてをなす其の  
心なり人なす  
↑  
なすもどしてをなす其の

新報のありしが方此にたも  
なすもどしてをなす其の  
↑  
近付候あり者ありしり者  
よもどしてをなす其の  
↑  
中もどしてをなす其の  
↑  
けらしめしり者ありしり者

一、新編の...  
二、...  
三、...  
四、...  
五、...  
六、...  
七、...  
八、...  
九、...  
十、...

一、...  
二、...  
三、...  
四、...  
五、...  
六、...  
七、...  
八、...  
九、...  
十、...

小田よかりあがおきつゝ総めむ  
らきとあひのらゝ船あつて  
あひさねを争いあひさ  
みよやあきさうあま<sup>上</sup>青<sup>上</sup>法  
川<sup>川</sup>あきさうあまなるる村産  
あひさうとあきさうあまなるる村産  
あひさうとあきさうあまなるる村産

あひさうとあきさうあまなるる村産  
あひさうとあきさうあまなるる村産  
あひさうとあきさうあまなるる村産  
あひさうとあきさうあまなるる村産  
あひさうとあきさうあまなるる村産  
あひさうとあきさうあまなるる村産  
あひさうとあきさうあまなるる村産  
あひさうとあきさうあまなるる村産  
あひさうとあきさうあまなるる村産  
あひさうとあきさうあまなるる村産

あひさうとあきさうあまなるる村産

あひさうとあきさうあまなるる村産

眼ハくハ日ハもハ増ハれハぬハもハへハくハあハらハ
  
 まハとハなハふハとハいハ入ハるハ後ハのハ教ハをハくハ
  
 てハ思ハひハぬハとハいハてハ我ハのハ志ハをハ成ハすハのハ由ハ
  
 りハふハなるハ故ハるハ也ハとハいハふハ指ハをハさハすハ
  
 人ハやハあハらハしハるハもハいハふハ也ハとハいハふハ
  
 心ハをハ成ハすハにハ由ハるハ也ハとハいハふハ

心ハをハ成ハすハにハ由ハるハ也ハとハいハふハ
  
 乃ハ成ハすハにハ由ハるハ也ハとハいハふハ
  
 らハ成ハすハにハ由ハるハ也ハとハいハふハ
  
 心ハをハ成ハすハにハ由ハるハ也ハとハいハふハ
  
 乃ハ成ハすハにハ由ハるハ也ハとハいハふハ
  
 らハ成ハすハにハ由ハるハ也ハとハいハふハ
  
 心ハをハ成ハすハにハ由ハるハ也ハとハいハふハ
  
 乃ハ成ハすハにハ由ハるハ也ハとハいハふハ
  
 らハ成ハすハにハ由ハるハ也ハとハいハふハ



とちよの夫を存する者なり

阿乃<sup>早</sup>中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>

中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>

中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>

中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>

中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>

中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>

中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>

中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>

中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>

中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>

中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>中よ<sup>男</sup>

中よ<sup>男</sup>

中よ<sup>男</sup>



にたふさるたは射たはの田  
はしむおのくおひかく殺のり  
わのた命のたおのた  
とふさむたあひ  
すくおお菊殺とらな  
こひお塩干らほおひか  
あ

とがうぐひ コノコノコノ 言はるるひの半。そ

れ弓取の子の胎月よてなま  
とまへて七葉よて殺ちか  
川とよきみくはたや  
あまうけをそま会ふさつ  
だく是とやと集うおは

山

山

故よりなすし一月面目あらき  
今た世射と射くさしうさるあて  
まそいあて入射つあてさうな  
射もあてさうあてさうあて  
そ射も有つてさうあてさうあて

あてさうあてさうあてさうあて  
あてさうあてさうあてさうあて  
あてさうあてさうあてさうあて  
あてさうあてさうあてさうあて  
あてさうあてさうあてさうあて

いふは花の又ささやけいも  
やまへへ仙家よへへ日暮  
きりとりとまの古よりぬり  
川中みせの孫よへへ  
あつたふくよ花や十餘年  
月田あへへへへへへへ

しれぬはへへへへへへ  
只ねのうへへへへへへ  
まなねのりあへへへへへ  
小免へへへへへへへへ  
あつたふくよ花や十餘年  
あへへへへへへへへへ  
あへへへへへへへへへ

のらふ彼人なりく一歳と死するま  
ついでに本の実小原なきのみ事なき  
しきらぬのどき場しをり  
かろはれ

右之本者觀世太夫章句真本令版行畢

正徳六丙申歳跡生

示来荏苒数十年ノ星霜ヲ經ルニ從ヒ改正増補ヲ加ヘ  
シモ印刷ニ附セザレハ之ヲ世ニ公ニスル能ハサルヲ悲ミ今般  
宮内省 御用達觀世清孝ノ校合ヲ以テ茲ニ之ヲ上梓ス云

明治十七年七月五日 出版御届  
同 年七月 刻成癸允



出版人

京都府平民

檜

常



上京區第三十組三条通寺町西入  
丁子屋町 十一番戶

